

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第510号 2024年9月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

私がペンギン作家になるまで

中村 ヨシタカ

「ペンギンは泳ぐように飛んでいる。ペンギン研究の大家、青柳昌宏さんの著書の一節です。不思議な言い回しですが、水中でのペンギンの様子を映像で見ると納得。地上にいるときのよちよちと歩くかわいい姿は微塵もなく、精悍な鳥の姿を見せます。

そんな不思議な鳥類ペンギンをテーマに作品を作り始めたのは、もう二十七、八年前のことになりました。土産物屋の紙粘土で作ったペンギンの置物を妻が欲しがったのですが、買わずに自分で作ってプレゼントしました。妻がペンギン好きなのだと思います、その後いくつも作りましたが、妻はその置物

がかわいいと思っただけで、ペンギンが好きというわけではないということが後になって分かりました。何のために作っていたのかとも思いましたが、その頃には、紙粘度でペンギンを作ることが自分の趣味になっていました。

その後、作ったペンギンたちを紹介するWEBサイトをみると、世の中のペンギン好きな人達から反応があり、毎年一回行われるペンギンだけの作品展に誘われ、毎年出品するようになりました。作ることですしつペンギンに詳しくなり、南極に生息するエンペラーペンギンの壮絶な生き様を知った時には、ペンギンは、ただかわ

いいだけではなく、畏敬の念を持つて見る存在に変わってしまいました。そして、この頃にはペンギン作りをライフワークにしようと思うまでになっていました。

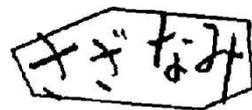
そんな頃に、ふと訪れたギャラリィで、作家さんからそのギャラリィで個展ができるよう紹介してもらえらることになり、ペンギンだけで個展を開催しました。その後も知人が紹介してくれたギャラリィで二回個展をし制作活動が広がりました。

振り返ってみると、ペンギンに全く興味のなかった私がペンギンを作るようになるまでには、多くの人の出会いがありました。「師は必要な時に現れる」という言葉があります、何かが私をそこへ導いていたのではないかと気がさえます。

当時、ネットがつなげてくれた出会いもありましたが、その人たちと直接出会ったことが私に大きく影響を与えたと感じます。

リモートで仕事ができしてしまうような世の中になりましたが、ただだけネットが普及しても、人が直接出会って言葉を交わすことの大切さは、忘れないようにしたいものです。

(宝塚市立末広小学校校長・ペンギン作家)



▼ある小学校の校内研究会の後、校長が研究テーマとなったのが、話題の人物はパル・フェンシング男子フルーレ団体の飯村一輝選手。彼が小学生として在籍していたという縁があったことなど。彼に興味をもって下さった校長先生が後日、次のメールを送ってくださいました。▼

8月5日のお帰りに教えてくださいました。飯村一輝さん。京都女子大学附属小学校卒業と聞き、何か親近感が湧き、ことあるごとに彼の報道に接しました。彼の素晴らしいのは、もちろん、練習を継続できる精神力であったり、探求心であったり、練習に裏付けられた物おじしない気持ちであったりします。しかし、彼のすばらしさは、数々のインタビューや記事の受け答えです。その非凡な言語化能力が、今の彼を支えているのではないかと思えるほどでした。言葉はもちろんのこと、自分の考えを聞き手に分かりやすく伝える時に応じた受け答えは、一朝一夕にできることではありません。その素地を、小学校時代に築いていたのだと確信しました(メール全文)▼在職していた小学校はその頃「国語力は人間力」を合言葉に指導をしていました。教育目標として育てたい子供の姿や授業の改善などについてご存知の校長先生です。ありがたいお言葉としていただきまし

(吉永幸司)

近江の国語実践研究会に

参加して
川部 長人

八月二十四日に行われた「近江の国語実践研究会」に参加した。今回の研究会のテーマは「言葉による見方・考え方を高める国語科の授業実践」である。私自身も言葉による見方・考え方を高めるとは、どういうことか考えながら研究会に参加した。今回は三年生の説明文の学習と、六年生の作文指導に関する授業構想について参加者のみなさんで考えた。いろいろな先生方の話を聞き、自分自身の学びとなったことについてまとめる。

① 「すがたをかえる大豆」(光村図書三年生) 提案者：少徳先生

「すがたをかえる大豆」の授業構想では、子どもたちが主体的に学んでいくための指導過程はどのような流れがよいか考えていった。学習のゴールとしてリーフレットづくりを位置づけ、そのゴールに向かって、ゲストスピーカーの話をもとで取り入れるかなど、子どもたちの意欲を高める手立てについて話し合われた。また、この教材は「にる」や「なめない」など説明文でないと思われる表現がたくさん出てくる。子どもたちの主体的な学びと説明文での学習をどのように両立していくかが重要だと思つた。

② 「六年生の作文教室」 提案者：畑中先生

六年生の作文教室では、畑中先生の一学期の取り組みを聞いた。子どもたちの作文を学級通信で紹介したり、構成を考えることで、子どもたちの伝えたいことが分かりやすくなったことなどが紹介された。今回の授業構想では、子どもたちが楽しんで作文の学習を進めていくには何が大切か考えた。私が大切だと思つたことは「先生が書かせたい題材」から「子どもたちが書きたい題材」に変えることとである。例えば「夏休みの思い出」を「一番ドキドキした夏休みの出来事」と変えることにより、理由が明確になる。ちよつとした工夫が、子どもたちが書きたいと思える意欲を高めるのではないかと思つた。また、作文を書く前にどんな活動を経験したことも大切である。その経験で感じたことや音、におい、心の声などを振り返る時間が大切である。そういつた積み重ねが、子どもたちの書く意欲を高めるのではないかと思つた。

③ 「言葉による見方・考え方を高める国語科の授業実践に向けて」吉永先生

最後の講話では、吉永先生から「言葉による見方・考え方」について実践をもとに話があった。話の中で心に残つたことは、国語を楽しいと自覚するためには「反応がある」「よいことを言う」とほめられる。「工夫すると上手だね」と認められる「よい国語教室をつくっていくことが大切である。夏休み明けの国語教室では、そういったところを大切にしていきたい。

(湖南市立菩提寺小学校)

『授業実践と

合同研究会での学び』

井上 混斗

さざなみ国語教室・竹の会・東風の会の合同研究発表会において、私は第二学年の国語科「こんなもの 見つけたよ」の授業実践を発表する機会をいただいた。本発表では、授業実践と研究会を通して得られた【成果】と【課題・改善点】について紹介する。

【成果】
①学習計画すごろくの活用

本単元では、学習内容や言語活動(学習ゴール)を「学習計画すごろく」として視覚化し、掲示することで、子どもたちの学習意欲を高めることに成功した。すごろく形式にすることで、子どもたちは学習の全体像を把握しやすく、主体的に学習に取り組む姿が見られた。

②子どもたち言葉のやりとり
本研究では、子どもたちが「はじめ・なか・おわり」の文章構成や発表原稿を、お互いに確認し合う時間を多く設けた。その結果、子どもたちは何度も自分の言葉を見直し、豊かな言葉の交流を通して、個々の表現力や思考力を深めることができた。

【課題・改善点】

①伝えたい視点の明示化
発表原稿を作成する際、発表のテーマが決まっても、子どもたちは

「何を伝えたいのか」という具体的な視点がぼやけており、単に情報を羅列しただけの発表原稿になってしまいがちであった。そこで、子どもたちが先に「おもしろさ」や「楽しさ」といった具体的な視点を持たせることで、子どもたちはより主体的に、伝えたいことを考え、表現することができたと感じる。また、発表のタイトルを事前に決めることで、子どもたちは伝えたいことをより明確にし、言葉遣いや発表の順序に工夫を凝らすことができたはずだ。

②教師でなく、子どもで見せる
発表原稿を書く活動では、明確な目指す姿を提示すべきであった。その時には、よりよい表現や書き方ができている児童を取り上げ、具体的な目標を共有することで、子どもたちはより明確な目標に向かって書くことができる。

今回の研究発表を通して、たくさんの方から貴重なご意見や考え、改善点を教えていただき、教育者として成長することができた。子どもたちの言葉による表現力や思考力は、教師の働きかけだけでなく、子どもたち同士の学び合いによって大きく育まれることを改めて実感した。今後は、今回の成果を踏まえ、より一層、子どもたちが言葉の力を活用していきけるような授業の実現を目指していきたい。

(豊郷町立日栄小学校)

話して考えを深める

畑中 翔太

日々6年生と関わっていると、「友達があるなら一緒にする」などの言葉が聞こえてきます。相手の心情を意識して行動を合わせた理由なく他の考えに影響されてしまったりする姿があります。よりよい行動に向けて自立した考えを持つために、自分のことについて考えを深める機会が大切だと感じます。少しずつ自分について考え話し合ったり、書いたりする活動に取り組んでいます。

2学期初めの「いちばん大事なものは」(光村6年生)は、これからの生活で大事にしたいものや考え方をグループで交流し質疑応答を通して考えを広げたり深めたりする学習です。あるグループでは、家族が一番大事だという意見に対して話し合う場面がありました。

C1 「私は、これからの生活で家族を大切にしていきたいです。」

C2 「それは、どうしてですか。」

C1 「家族は私だめなことをした時に叱ってくれるし、良いことをしたときは褒めてくれるからです。」

C2 「それは先生も同じだと思います。」

C1 「赤ちゃんの時から見てくれているので、感謝しています。」

C3 「C1さんが、この家族でよかったと思うところはどこですか。」

C1 「えーと。なんだろう。・・・」

T 「じっくり考えて答えが出たら、まとめて書きましよう。」

C1さんはC3さんの質問の答えにどう答えようか悩んでいる様子でした。グループでの話し合いが終わってもずっと考えている姿があり、自分がなぜ家族を大事に思っているのかを深く考えようとしている姿がありました。

グループでの話し合いの後に自分の意見をまとめる時間をとりました。C1さんは、「C3さんに『この家族でよかったところ』と質問されてすぐに答えられませんでした。考えた結果私の家族は私が困っている時に全力で助けてくれるところが大好きだということに気づきました。そんな家族のことをこれからも大事にしていきたいです。」と振り返っていました。

自分で考えることに加えて、話し合うことで考えを広げ違う視点で物事を見る子どもの姿がありました。今後、行動や悩みなどにもスポットを当て話し合う活動に取り組む、より深く自分を捉えている活動を工夫していきます。

(大津市立田上小学校)

友だちと楽しく読みを広げるために

山田 定子

「まいごのかぎ」(光村三年上)は、かぎを拾った「りいこ」に不思議なことが次々と起こるファンタジー作品である。その出来事の中で中心人物「りいこ」の気持ちや思いを読み取っていくことが学習の中心となる。さらに、自分の読みと友だちの読みとの違うところや似ているところ、そして、そこから新しく気付いたこと等を交流できるような学習となるようにした。

まず、各場面の文章を音読、視写し、いくつかの言葉について、付け加えや言い換え等をしていった。次に、「りいこ」の気持ちや考え等を自分の言葉でまとめた後、各々が好きだと思う場面を交流するようにした。ほとんどの子が、「りいこ」がうさぎに手を振っている最後の場面を選んでいったが、友だちの発表と自分の考えとの相違点を考えながらメモを取る等して聞くことができた。いろいろな考えを交流する中で、「かぎ」のことが話題になった。話し合っていく内に、「かぎ」は、「みんなのやりたいことをかなえるもの」「願いがかなうもの」「みんなを楽しませるもの」「いろいろな楽しみがたまっているもの」「やさしさのつまったもの(みんなを自由にさせるやさしさ)」といったように多くの考えが出された。さらに、「不思議な楽しみがたまっているもの」「みんなを笑顔にさせて、りいこを元気にさせるもの」といった考えも出された。このような各々の「かぎ」に対する捉えを元

にして自分の好きな場面を考えることになって、「りいこ」の気持ちの変化も分かりやすくまとめていくことができた様子であった。さらに、友だちの考えをいろいろと聞くことで、自分の気付かなかったことに触れ、考えを深めたり広げたりする様子が伺えた。

最後に、自分がかぎを持ったらどこにさすか、続きの話を各々が考えるようにした。どの子も楽しい話が書け、友だちが考えた話をここにこしながら読み合うことができた。例えば、ピアノの穴にかぎをさすと楽しい曲が勝手に流れてくる話、国語辞典にある小さい穴にかぎをさしこんでみるとたくさんのかぎが出てくる話、また、みかんの木の穴にかぎをさしこむとアゲハチョウ等の虫がたくさん出てくる話など、自分たちがしてみたいことを話にすることができた。いつも書くことに困っている子も、楽しそうに鉛筆を走らせていたのが印象的であった。

学習の足跡としてワークシートや作文などをまとめ、それを持ち帰るようにした。お家の人からは、「りいこ」の変化する気持ちがよく考えられていた。

- ・好きな場面について、その理由など自分の思いや考えもしっかりと書けていた。
- ・自分で考えて作ったお話が楽しくて上手に書かれていた。
- ・といった感想がたくさん寄せられた。それを読んだ子ども達もとても嬉しそうにしていた。

友だちと考えを交流することによって自分の読みが深まったり広がったりする、ということを知り、子ども達も少しでも実感することができた嬉し。

(野洲市立北野小学校)

近江の国語実践研究会報告
蜂屋 正雄

毎年、国語実践の研究交流ができる会を開いている。今回は教材研究会で、次回で実践報告を聞き、成果と課題を議論する予定である。研究会の様子を紹介したい。

指導構想①

「すがたをかえる大豆」(光村3年) 少徳信先生(彦根市立高宮小学校)

説明文を読む+説明文の工夫をまねながら書くという複合単元である。

ゴールイメージとしては、食べもののひみつを栄養教諭に見てもらうこと、また、教材文を読むなかで、ゲストティーチャーとして、「醤油博士」に醤油の秘密を教えてもらうこと、を設定された。また、読むときに、子どもたちに「自動詞としての問い」を交流させ、「問わずにはいられない」状況を作ることを大切にしておられた。

参加者との交流の中で

○「問いの質・内容」が大切で、子供の「すごい」は内容についてのもので、著者や構成についてのものであるのではないか。
○説明文でない使わない表現を語彙として身につけさせたい。
など、様々な意見をいただいた。複合単元の難しさとして、リーフレットづくりなど、ゴールイメージを持たせすぎると、教材文の

魅力を十分に味わわずに終わることがある。読むことと書くことのバランスとタイミングついて、考えていきたい。

少徳先生には、自動詞としての問いや対話読みの効用、また、どの順番で書くかを考えるときにピラミッドチャートを使うなど、授業展開でのいくつもの提案もいただいた。次回の報告を楽しみに待ちたい。

指導構想②

「自分説明書」(作文) 畑中翔太先生(大津市立田上小学校)

日々の書くことを大切にしておられる。自分の行動のもとになっているのは何なのかを自覚させ、高学年として自分の客観的理解を進めていきたい、と考え単元を構成されていた。

現在、教室では学習の振り返りやまとめ、感想といった場面で書くことが注目されており、教科書からは日記のように自分の日常を描く活動は減っている。返事の負担感もあるが、生徒指導的児童理解の側面からも自分のことを書かせることは大きな効用があるという考えは共有されている。畑中実践で何かヒントももらいたい。

実践協力者である海東貴利先生(高島市立牧野東小学校)からは、「自分理解 学び合い 書く楽しさ」というテーマで、実践を提示いただいた。児童が「書ける」と思えるようになる決め手は「書くことが面白い」という感覚と「何を書くか」がわかりやすい安心感であるということ。また、それに

ついでに具体的な実践事例とともに、「おおきいみかん」の頭文字で材料を集め、100字の作文の模擬授業をいただいた。

畑中先生には「自分説明書」に至るまでの年間の作文計画なども提案いただいた。本時までの過程を含めて「成果」と「課題」を見せていただけるものと、報告を楽しみに待ちたい。

両構想とも、本時に「はじめての学習」が1つになるように、本時までの積み上げが大切である、という意見もいただき、明日からの実践につながる研究会となった。

指導講話

「言葉による見方・考え方を高める授業実践に向けて」というテーマで

吉永幸司先生に講話いただいた。

指導要領に立ち返り、児童が学習の中で対象と言葉、言葉と言葉との関係、言葉の意味・はたらき・使い方等に着目して、捉えたり、問い直したりして言葉への自覚を高めること、が必要である。という話を伺った。「言葉の使い方、心が動くことが言葉の力をつけていくことである。」という一文が印象に残りました。ありがとうございます。

両構想の報告は、少徳先生が全国国語実践研究大会・滋賀大会(12月26日・27日)草津エスタピアホテル。畑中先生が近江の国語実践研究会(2月15日(土)ピアザ淡海)となる。ご期待ください。

(野洲市立祇王小学校)

編集後記

▼8月例会(第10回)近江の

国語実践研究会(会場キラリエ草津・草津市)に参加しました。研究主題「言葉を大切に、自ら学習・生活を高める子を育てる」のもと提案と協議をしました。▼提案者は少徳信(高宮小)実践協力者・蜂屋正雄(研究教材として「すがたをかえる大豆」)「食べ物のみつを教えます」について「問わずにはいられない」状態を大切にしたいという考えを柱にしたという考えを発表した。畑中翔太(田上小)実践協力者海東貴利(マキノ東小)は6年生の作文指導の提案をした。書いて自分の考えを伝えることは難しいと感じている子は多い。話すこと・聞くことの手間をかけ、言葉を選んで書くことは面倒な学習活動なのだろう。それ乗り越えて書く活動を積み上げることが大事であるという提案。▼二人の提案は、この日を始点としたもの。これから実践をするというものである。二つの実践の成果は「全国国語実践研究会」(12月11日草津エスタピアホテル)及び、「第11回近江の国語実践研究会」(2月・ピアザ淡海)で発表することが決まっています。▼講演「言葉による見方・考え方を高める授業実践に向けて」(吉永幸司) 総括「研究に学ぶ」(川那部隆徳・金勝小)が行った。参加者から「自分の中の国語教育がまた1つ豊かになりました」というコメントをいただきました。ありがとうございました。
▼(文中敬称略) 中村ヨシタカ先生から玉稿を頂きました。深謝。
(吉永幸司)